月、一月ノ三回ニ分納セシメ、校友会費ハ年額金六円ニシテ授業料ト共ニ之ヲ分納セシム

研究実習費ハ生徒自弁ニシテ月額約二拾円ノ見込

(五)特殊学生制度ニ関スル事項

委託生、特選給費生等ノ入学ヲ許可シタルコトナシ

但シ特別学生ニシテ希望学課ニ対シ聴講スルコトヲ許セリ

(六)諸規程内規ニ関スル事項

外国学生入学規程アルノ外規程等特ニナシ

(七)学力、体力、性行等ニ関スル事項

イ、試験成績ハ本科（本邦学生）生ニ比シ中等以下ナルモ最近漸次向上ノ傾向ヲ示セリ

ロ、性行勤惰、温順ニシテ熱心ニ勉学ス

ハ、思想宗教、孔教ニシテ（基督教一名アリ）平和主義ト称スニ、性癖趣味、趣味ハ音楽、活動写真ニシテ遊猟ヲ好ムモノアリホ、運動体力、特ニ運動ヲナサヽルモ体力ハ普通健康ナリ

ヘ、一般的長所及短所　焦燥ノ氣風ナシ

(八)本邦学生トノ聯絡ニ関スル事項

学習ハ本邦学生ト同一教室ニアリテ共学ス、校友会諸大會ナドニモ隨意出席シ、学校ニ於テノ交際ハ円滑ニシテ本邦学生間ノ交際ト何等異ナルコトナシ

(九)支那留学生指導及奨励ニ関スル事項

本邦学生ト同一ノ取扱ヲナス方針ヲ執レリ

支那留学生中ニ総代ヲ置キ留学生間ニ校友會ヲ組織シ時々茶話會ヲ開キ学校側ヨリモ出席シテ彼等ノ希望ヲ聞キ又タ本校ノ意志ヲ傳ヘ融和ヲ計レリ

(十)寄宿舎、下宿ニ関スル事項

寄宿舎三名、下宿三名、民家一名

宿料ハ二十七八円

二、豫備教育ノ情況

本校ニ入学志望者ハ豫備教育トシテ繪画及邦語ヲ学修スルヲ要ス

入学前ノ学歴○本国ニ於テ受ケタル普通教育ハ概シテ中学校卒業程度ニシテ、本邦ニ於テ受ケタル教育ハ東亜豫備学校ニ於テ邦語ヲ約一ヶ年及川端画学校ニ於テ木炭画ヲ研究セリ

三、卒業後ノ情況

支那留学生トシテ明治四十四年三月初メテ卒業生ヲ出セシ以来本年三月マデノ卒業生計二十九人ニシテ内二名ハ図画師範科其他ハ西洋画科卒業生ナリ

多ク本国ニ帰リテ自営若クハ教育ニ従事シ上海美術学校、北京、南京美術学校又ハ直隷省保定府師範学校等ニ就職セルモノアリ

母校トノ聯絡ハ直接ノ聯絡殆ント無キモ、本校関係者等渡支ノ場合等ハ歓待斡旋ニ努ムルヲ見ル

② 外国人留学生

概況

本校に在籍した外国人生徒約二百五十名の内訳は次のとおりである。

中国籍九十六名（四十五名卒業）

朝鮮籍八十九名（六十四名卒業）

台湾籍二十九名（二十一名卒業）
満州・関東州籍九名（四名卒業）
アメリカ国籍六名（二名卒業）
タイ国籍四名（三名卒業）
インドネシア国籍三名
インド国籍二名
ドイツ・イギリス・アフガニスタン・ジャワ・ベルギー・フランス国籍各一名（計一名卒業）

本書第二巻120頁に、外国人留学生第一号は明治三十四年入学のアメリカ人ジョセフィン・ハイドであると記したが、新資料の発見により彼女の前にドイツ人ワルテル・エルカン（明治二十九年在籍）とイギリス人メリー・ロイド（同三十三年在籍）が居たことが判明したので、ここで訂正しておく。

明治三十七年までの留学生は西洋人のみで、しかも極く少数であったが、三十八年に中国人留学生第一号として黄甫周が入学、同四十一年に朝鮮人の第一号として朴鎮栄が入学し、それを発端として中国、朝鮮からの留学生が増え始めた。台湾籍の生徒はやや遅れて大正四年入学の黄土水が最初であった。

受入れ体勢

大正中期頃までは外国人の入学志願者が少なかったため臨機応変に選科生として受け入れていた。選科生は原則として本科生に欠員のある場合に募集することになっており、募集するかしないか、あるいは募集数は各科の状況によって決定された。ただし、外国人は特別に入学を許可する慣例があり、例えば大正三年、日本人生徒を募集しなかった日本画科に伍霊、陳英、孟憲章を、西洋画科に凌驥、劉鏡源、李延英を、鋳造科に欧陽植を採用したのはこの慣例による。大正後半より昭和初期にかけての時期は志願者が急激に増加したため、既述の「外国学生特別入学規程細則」が定められたが、この頃になると外国人の入学は困難なものとなった。この時期には巻末の表が示すとおり、日本人の志願者も急速に増加しつつあり、それに対して定員増加や設備拡張といった措置がとられなかったため、競争率は高くなる一方であった。特に西洋画科は志願者が多く、外国人の志願者もまた多かった。

西洋画科は明治二十九年の開設以来、油絵の画法の移植と制作の研究に大きな実績を上げ、アジア諸国のなかで最もヨーロッパの本流に近い、あるいは完全度の高い教育を行う場と見なされ、そうした教育機関を持たない近隣諸国から留学志願者が集まったのである。同科では明治三十八年以降徐々に留学生が増え、大正元年には十名以上が在籍、同九年以降は毎年二十名以上在籍という状態となった。最も多かったのは昭和四年の三十一名で、その後徐々に減り、同七年以降は毎年十数名在籍という状態となっている。

西洋画科に次いで留学生が多かったのは彫刻科で、同科の場合は昭和十年以降になって留学生が増加し始めるが、毎年の在籍者数は八、九名程度であった。同科に次いで図案科と図画師範科、日本画科、彫金科と漆工科、鋳金科、鍛金科と建築科の順となっているが、西洋画科に比べればその数は微々たるものであった。

日本人志願者と同様、外国人志願者にとっても西洋画科は狭き門であった。昭和三年を例に取ると、外国人志願者各科合計三十六名

（合格九名）のところ西洋画科志願者十七名（合格六名）であって、幾度も入試に挑戦して漸く合格する者も少なくなかった。それに対して学校当局はどのように対処したかというと、詳しい資料は残っていないが、留学生関係の記録文書綴によれば、毎年外国から留学生受入れに関する種々の問い合わせがあったことが記されており、それらに対して例えば、

「本校ニ於イテハ外国学生特別入学規程ヲ設ケ入学ノ途ハ開キアルモ本那人ニテモ容易ニ入学シ能ハサル実情ナルニ付外国人ヲ収容スルコトハ困難ノ事ニ属スルモ国際関係ヲ顧慮シ日本語ヲ解スル満支両国人ニハ油画科彫刻科ニ年々少数入学ヲ許可シ居リ」云々

（昭和十年十一月二十一日外務省宛文書）

などと、消極的姿勢を示すのが常であった。

外国人生徒の入試は大正十二年までは九月に、十三年からは三月に行われた。受験資格は「相当学歴のある者（日本の中学校卒業程度）」とされ、合否の判定は実技と簡単な日本語の試験によってなされた。合格後は日本人と同じ諸規則が適用された。

外国人生徒は、中国、満州国出身者の一部が日本の外務省文化事業部や満州文教部の補助金を受けていただけで、大半は私費留学であった。裕福な家庭の者もいたが、全てがそうでなく、故郷からの仕送りが遅れて停学、退学になった例も多々ある。因みにどの程度の費用を要したかと言うと、記録の残る昭和十年の例では各科予科から第四学年までは授業料が年八十円、実習実験費が月約八円、校友会諸会費が月約六円、学用品費が月約十五円、下宿料が月約三十五円、その他が月約十円で、第三学年以上は実習実験費が月約二十二円（工芸科彫金、鍛金、鋳金部は徴収せず）に、学用品費が月約二十円に増える。研究科では授業料が年五十円、校友会諸会費〇円で、実習実験費が月約三十円とされている。

留学生概況

一、中国人留学生

在籍者数が最も多いのは中国人であるが、大正十二年を境に朝鮮人生徒が急増したのに対してやや減少傾向を示し、昭和十二年の日中戦争開始に至って全員帰国の事態が生じ（760頁参照）、その後は極端に減少している。それはさておき、近代の日中両国間の政治情勢が平穏でなかったにも拘らず、多くの中国人生徒が本校に留学したのは、ただ単に先進的（西欧的）美術、美術思想を手近に摂取できるということがその要因だったのだろうか。朝鮮、台湾の場合は後述のように日本の官展の移植であるところの朝鮮美術展覧会、台湾美術展覧会の設置が留学生増加の要因として働いたと考えられるが、中国にはそのように太いパイプは敷設されなかった。では何が中国人留学生たちの本校に関する情報源だったのか。その答えは今後一人一人の留学生について検証した上で出すべきだが、本校の卒業生たちが中国の各地で教えていたことも恐らく一つの情報源となっただろう。参考までに大正十年以前に中国で教員をしていたことのある卒業生の名を掲げておく。

早崎　梗吉（陝西省三原宏道大学堂、西安武備大学堂）

有馬　龍秀（同省三原県省立工業学堂）

松長長三郎（天津商品陳列所、直隷高等工芸学堂、天津工芸学堂）

高橋　勇（北京大学堂）
森岡　柳蔵（同右）
信谷　友三（北京工芸学堂）
岩滝　多磨（同右）
秋野　外也（同右）
野田　昇平（同右）
佐々木惣三郎（旅順関東都督府中学校、同高等女学校）
原田謹次郎（福州工芸学堂、福建工芸廠）
移川　三郎（四川省成都中等工業学堂）
今田　直策（同成都府商務総局高等実業学校、成都皇城内工業学堂）
飯尾駒太郎（成都高等学堂）
松里　政登（陝西省西安高等師範学堂）
丸野　豊（山西省太原府優級師範学堂）
来海篤次郎（北京芸徒学堂）
佐藤三代治（奉天南満中学堂）

なお、本校参観者に関する記録文書（明治四十四年本校火災の際に焼け残った文書の一つで、明治三十六年四月から同三十九年末までの分が現存する）を見ると、中国の官庁や学校から本校の視察に訪れた人は多数あり、明治三十六年が三十七名、同三十七年が百十六名、同三十八年が二百七十八名以上、同三十九年が百七十七名の計六百八名以上となっている。それに対して朝鮮からは三十六～三十九年の間に計約十二名、西欧各国からは計約二十七名が来校している。中国人参観者の殆んどは官立諸学校視察の途次に本校を訪れたものらしいが、なかには江蘇省における美術振興の参考にするため参観に来た袁希語や広東省に工芸学堂を設立する準備として来校した黄受謙のように、特に本校参観を目的としていた人々もあった。こうした参観者たちによって本校に関する情報が詳しく伝えられたに違いない。

また、大正中期以降、日中戦争以前に展開された日中美術交流運動（『東京芸術大学美術学部紀要』第二十九号所載吉田千鶴子著「大村西崖と中国」参照）は両国の画家や学者の交流を盛んにし、日本の美術界の情報を伝える契機となったに違いなく、それは中国の若者たちを本校に誘う大きな要因となったと考えられる。

中国人留学生を科（部）別に見ると、西洋画（油画）六十九名、彫刻九名、図案七名、日本画四名、金工および図画師範各二名、鋳金、建築、学科聴講各一名である。彼らが帰国後いかなる活動をし、特に美術の発展にどのように寄与したかということは大変重要な問題であるが、その解明は今後の調査に待つ外はない。わが国におけるこの方面の研究のさきがけとして鶴田武良著「近百年来中国画人資料」一～四（『美術研究』第二九三～三〇七号、昭和四十九～五十三年）があり、そこには広範な文献資料の調査結果として近百年来の画家約三千名の名が掲げられている。そのなかに本校に留学した者七十名（満州、台湾出身者も含む）の名も記されているが、帰国後の事蹟が多少なりとも記載されているのは、諸美術学校に勤務したことにより記録文献に名を留めている者十五名に過ぎず、これによっても追跡調査の困難さが忍ばれる。ここでは極めて断片的ながら今までに把握した事柄を記しておく。

中華民国留学生同窓会　大正14年２月４日　於神田
前列右より小林万吾、藤島武二、正木直彦、和田英作、長原孝太郎
後列右より林丙東、譚連登、衛天霖、岡四郎、蔡侃、鈴川信一、鄭皚生、丁衍鏞、王道源
（『東京美術学校校友会月報』第24巻第１号より転載）

一九一〇年代卒業者

○李岸　はじめ杭州第一師範学校に勤務し、のち杭州大慈山定慧寺（俗名虎跑寺）住職となり、法名を演音、号を弘一と称した。中国で西洋画実習に裸体モデルを最初に使用したのは上海美術専科学校で、民国六年（一九一七）であるとされるが、それより三年前に李岸が浙江省立第一師範学校図画手工科で男子裸体モデルを使用したのが最初であるとする説もある（鶴田武良著「民国期中国における裸体画論争」『東アジア美術における「人のかたち」』平成六年、東京国立文化財研究所）。なお、李岸は画家というより宗教家、音楽家、話劇家、書家として中国で高く評価されている。本学附属図書館には大正四年三月に李岸から寄贈された『楽石集』が収蔵されている。

○曾延年　国変のため上海、天津、次いで郷里成都へと転じ、成都の陶瓷講習所図案教官となった。のち戯劇家として活躍。李岸とともに劇団春柳社を作った。

○厳智開　英仏に長期留学後、天津美術館を興し、館長となり、のち国立北京美術学校校長となった。

○江新　字小鶴。上海美術専科学校教授となり、上海の美術界で活躍。

○李延英　雲南省立美術学校校長となった。

一九二〇年代卒業者

○許敦谷　陳抱一、胡根天と芸術社を組織、北平、広州、武昌の芸術専科学校教授を歴任。

○陳洪鈞　号抱一。一時期中華芸術大学洋画部主任をつとめた。

○周勤豪　上海芸術大学、東方芸術研究所を創設。上海画壇に重きをなした。劉海粟妹婿。

○汪亜塵　フランスに留学し、帰国後新華芸術専科学校を創設、校長となり、また上海美術専科学校教授をつとめ、天馬会、黙社所属。上海美会理事として活躍。解放後渡米、のち台湾に移る。

○譚華牧　広州芸術専科学校教授となった。

○衛天霖　北京大学造型美術部導師、北京芸術専科学校教授となった。

○王道源　上海芸術専科学校教授となった。

○陳杰　号之仏。国立芸術専科学校校長、南京芸術学院副院長。
○丁衍鏞　広東芸術専科学校を創設。立達学園、中華芸術大学教授となった。
一九三〇年代卒業者
○許達　字幸之。中華芸術大学教授、左連執行委員をつとめ、のち中央美術学院教授、中国美術家協会理事となった。
○王文溥　のち中央美術学院副院長。
○司徒慧敏（中退）　のち映画プロデューサー、監督となり、中国文化部副部長、中国電影工作者協会副主席等を歴任。
○林乃幹　北京芸術専科学校、京華美術学院等の教授をつとめた。
○於中和　蘇州美術学校教員となった。
○俞成輝　南京芸術学院教授となった。
○徐文熙　国立芸術専科学校講師をつとめた。
○王式廓　中央美術学院教授となった。

なお、中国人留学生の帰国後の消息に触れた珍しい新聞記事（本学附属図書館蔵「諸新聞切り抜き」昭和六年三月十五日記事。紙名判読不可能）を左に転載する。

中華洋畫家の群　日、佛の二潮流　　澤村幸夫

支那の現在の洋畫界には、日本から入つたもの、フランスから入つたもの、大體二つの潮流があるやうである。假りに日本派とよぶ前者は、わが東京美術學校出身者が、數において多きを占めてをり、業績も擧げてゐる。たゞ民國となつて以來、政治的、社會的不安が打ち續いてゐるため、團體運動の特に見るべきものもなければ、美術家として名を成す機會を與へらるゝことが少いのはまことに氣の毒千萬である。私の知つてゐるところでは、東京美術學校出の人としては、明治四十三年ごろの卒業生李岸氏――叔同、直隷人――が一番古い。留學中に春柳劇社といふを組織し音樂も學び歸國後、一時、杭州師範學校教師を勤めてゐたが、資產も愛妻もともに失つて、佛門に歸依した。弘一律主――一音、論月などゝも稱してゐる――といふのは、その遁世後の法名で『〔字不明〕分律比丘戒相表記』などいふ專門的著書もある。この人は、今は、無論、畫壇の人ではないが、支那の洋畫を語るには、忘れてならない大先輩の一人である。

次に來るべき古顏は、江新氏――字は小鶼、蘇州の人――で、翰林院學士を父として生れながら藝術家風な血をうけた人で、上海において最も古い洋畫家の團體「天馬會」の中心をなしてゐる。今は洋畫の外に彫刻をもやつてゐる。天馬會は、上海美術專門學校の教授あたりが組織して、會員約卅人、この十一年以來毎年一回の展覽會を開いて來てゐる。

江氏と同期の日本留學生では、滿洲人の白鶴齡、山東人の汪洋、四川の人で今は故人の方明遠などいふ人がゐたが、第一革命に歸國したゝめ卒業は後れてゐる。大正八九年以後の〔東京〕日本美術學校出では、陳抱一、王道源、汪亞塵、嚴智開、許太谷――又敦谷、許幸之、胡根天などの諸氏がある。陳氏は、廣東人で上海に生れ、歸國後、神州女學に教へてゐたころ、その子弟中から關紫蘭、翁元春、唐蘊玉等の才媛を出してゐる。關女史は、中川紀元

氏の言をかつていへば『牡丹にも譬ふべき稀世の麗人』である。彼女の藝術は『自由獨特であり、新鋭、直截である』　わが文化學院に二年あまりゐ、二科に入選したこともある。唐女史も關氏と同じころ東京に留學し、石井柏亭氏の指導をうけた。今は佛國にいつてゐる。

陳抱一氏は、王道源氏とゝもに上海藝術專科學校を經營して、洋畫運動の最尖端に立つてゐる。許太谷氏は現に武昌藝術專科學校にゐるが、上海にあつたころは、陳、故二氏等とゝもに藝術社を組織して、上海美術專門學校の一派と對抗してゐた。

周勤豪氏は、潮州の人、上海美術專門學校長劉海粟氏の妹婿だが、同事者といふのではない。上海に初めて藝術大學を興して失敗し、つゞいて東方藝術研究所を設けて、また失敗した。原因は左翼畫家と見られたゝめだと傳へてゐる。

嚴智開氏は、清末の教育家嚴修先生の子で、現に天津美術館長。汪亞塵氏は、昨年の秋、佛國留學から歸つて、現に新華美術學校校長。

劉海粟氏は、常熟の人、上海圖畫學校の卒業生で、民國元年に美術學校を起して現にその校長である。歳は三十五、六に過ぎないだらうが事業家肌のやり手で、上記の人々に對して一敵國をなしてゐる觀がある。洋畫は規則的階梯をふんで學んだのではない。もつとも近年佛蘭西に留學して、南京の徐悲鴻、杭州の李超士、同じく林風眠氏等と共に佛國派を形づくらんとしてゐる。強いタッチ、強い色を用ひるのが、これ等の人々の特色。張聿光といふ洋畫の大先輩がある。劉海粟氏等を出した上海圖畫學校の創始者であるとゝもに、洋畫の創始者だ。この人は、師承するところなく、一意コッピーによつて獨習したので、その業績を知るものからは、今も相當な敬意を拂はれてゐる。

中国人留学生のなかには動乱の時代の子として本校在校中から左翼活動、革命運動に加わる者もあった。そうした活動が盛り上がったのは東京におけるプロレタリア美術運動が最高潮に達し、本校生たちの間でもそれが最も盛んだった時期と重なる。すなわち、昭和四年二月、鄭疇の意見により東京で文学活動をしている中国人留学生を集めて青年芸術家連盟が組織された。発起人は王道源、許達、沈西苓、司徒慧敏、余炳文、漆宗犧、漆宗裳で、許達と司徒慧敏は本校本科の、王道源は研究科の在校生。外に沈玆九（胡愈之夫人）、蔡素馨（夏衍夫人）、周揚（起応）、憑憲章なども参加し、左翼文化人藤枝丈夫、秋田雨雀、村山知義らと交流、影響を受けた。しかし、同年秋、東京特支事件に関連してメンバーが逮捕拘留され、活動は弾圧された。このとき中国人留学生の左翼組織社会科学研究会に所属していた葉仲豪（本校油画科に在籍）も逮捕され、卒業を前に強制送還された。『わが青春の日本』（昭和五十七年、東方書院）には図案科に在籍していた司徒慧敏の「五人の学友たち」と西洋画科藤島教室に在籍していた許達の「東京でかいた一枚の絵」が収録されており、ともに本校在校中の事柄が記されているので大変参考になる。許達は郭沫若の仕送りを受けながら勉強していたが、東京特支事件の際逮捕投獄され、岡四郎を介して正木直彦校長に保釈願いを出して貰い、釈放、復学し、かろうじて卒業した。司徒慧敏は入

学して一年もたたぬうちにやはり東京特支事件の際逮捕され、釈放後直ちに帰国。記録には昭和五年五月授業料滞納除名とある。左記はその「五人の学友たち」の抜粋である。

戦争前夜の日々に

わたしの日本留学期間は、ちょうど中国国内の政局が激しく変化する時期であった。中国の政局に対する見方について、当時、日本に留学している中国学生は二派に分かれていた。一派は当時の国民党右翼分子であった。かれらのうち、多くのものが西巣鴨に住んでいたので、この一派は「西巣鴨派」とよばれていた。

他の一派は学生たちの組織した社会科学研究会（いってみればマルクス、エンゲルス、レーニンの著作読書会）を中心とした進歩的学生である。もちろん、そのほか、政治的に中間の態度をとっている学生も少なくなかった。

そのころ、東京市内にある青山会館、神田基督教青年会は、よく両派の学生の激しい闘争の場所となった。当時、中国国内では、国民党当局が江西、湖南、福建などの赤色政権にむけて徐徐に包囲攻撃をはじめ、上海、北平（北京）、広州などでは白色テロを行ない、革命運動を弾圧していた。こうした動きについて、日本に留学する両派の学生はいつも議論し、しばしば腕力沙汰をひきおこすまでとなり、闘争は激しくなっていった。

一九二八年、東京に留学している中国留学生によって、左翼芸術家連盟〔前出の青年芸術家連盟のこと――編者注〕が組織された。これには、前に卒業して帰国し、またふたたび日本にきていた夏衍、それに沈西苓、許幸之〔許達〕など、進歩的な愛国学生の顔がみられた。わたしもこの組織に加入した。活動をすすめるなかで、わたしたちは何人かの日本演劇界の先輩や進歩的な友人とつながりをもった。日本の有名な演劇人である秋田雨雀、村山知義、藤森成吉などの諸先生は、いつもわたしたちと連絡をとり、講義もしてくれた。村山知義先生はドイツ留学の学生で、当時は帰国してまもないころであった、と記憶している。

秋田雨雀先生は、当時、五十歳そこそこだったと思うが、すでにまっ白な髪をしていた。ソ連を訪問し帰国してまもなく、われわれの左翼芸術家連盟が神田の文化会館でひらいた会議の席上で、当時のソ連戯劇界の状況を詳しく紹介してくれた。秋田先生はそのころ早稲田大学の近くに住んでいた。わたしも一時、下落合に住んでいて、さほど遠くない。そこで、夜は高田馬場駅の高架電車ガード下にある焼きとり屋で、わたしたちとおしゃべりし、日本およびヨーロッパの文学、演劇について話してくれたのである。

一九六二年にわたしが日本を訪問したときには、先生は八十三歳の高齢で、舞台芸術学院の院長をしておられた。わたしは、日中文化交流協会を通じて、関西地方から東京にもどったときお会いしたいと約束していたのだが、はからずも、それを果たさぬうち、五月十三日、先生は逝去されてしまった。わたしは悲しさと口惜しさでいっぱいになり、先生の葬儀に参列した。

一九二八年末から一九三〇年の初めごろまでの間、わたしは左翼芸術家連盟の友人たちといっしょに、よく築地小劇場へいって

勉強したり、その公演活動に参加したりしていた。たしか中国の「暴力団の記」や、「西部戦線異状なし」「ガスマスク」などを公演した憶えがある。日本の進歩的な演劇が、一九三〇年代はじめの新劇運動にあたえた影響は、きわめて大きい。当時、上海芸術劇社、その他の劇団が日本語から翻訳した多くの作品を上演しているが、そんなところにも、日本の新劇からうけた影響がよくあらわれている。わたしは、左翼芸術家連盟など校外の活動に参加すると同時に、日本大学に初めてできた映画研究班にも参加した。

わたしたちは、日本の芸術家たちとの交流を通じて、多くのものを学びとると同時に、相互の理解と友好を深めたのだった。だが、ちょうどそのころ、世界経済の危機は最後の段階をむかえ、日本の軍国主義勢力は日ましにはびこり、ファシズム戦争勃発の危機が迫っていた。日本国内の進歩的な組織や進歩的な活動はひどく抑圧され、わたしたち中国留学生の進歩的な活動も、もちろん、あれこれの制限、監視、迫害をうけるようになった。一九二九年の秋、日本各地にいる多くの進歩的な中国留学生が日本の警察に逮捕され、留置のうえ取調べをうけた。それは千数百人にものぼった。拘留期間は長短いろいろで、長い者で半年以上、短い者で一、二ヵ月だった。わたしもこのとき逮捕された学生のひとりだった。当時わたしは社会科学研究会と左翼芸術家連盟に参加したほかに、帝国主義戦争反対同盟の活動にも参加していたためであった。この同盟は日本各界の進歩的な人たちが組織したもので、日本軍国主義の戦争に反対することを主旨とした大衆団体であった。わたしはまず本所区の警察に三週間あまり留置されたあと、銀座の日本橋よりの小さな通りにある警察署に移されてまた三週間ほど留置された。母校の千頭庸也教授〔庸哉。助教授〕が警察に足を運んでくれて、やっとわたしは釈放された。

千頭教授は、当時学校の「思想善導委員会」の責任者だったが、ファシストたちとは違っていたし、中国人にたいして友好的な感情をもっており、心から青年を愛していた。その気持ちには感謝するほかない。

警察署から釈放されて出てくると、町の大通りを新聞の号外売りが腰につけた鈴を鳴らして叫びながら売り歩いていた。

「号外だ！　号外だ！　金解禁だよ、金が解禁されたよ」

その意味は、それまで実施されていた金の輸出禁止を解除し、金本位制に復帰するというのである。一九二八年アメリカとヨーロッパにおこった世界的な経済恐慌の波が、日本を襲った。この悪いニュースは、日本軍国主義、ファシズムによる政変の前兆であった。わたしはこうした空気のもとで、余儀なくうるわしいこの島を後にし、温かい友好的な心をもっている多くの日本の友人たちに黙って別れをつげたのであった。

本校の中国人留学生の概況および青年芸術家連盟については『左連研究』第三輯（平成五年）所載小谷一郎著「解説・東京美術学校に在籍した中国人留学生――王道源、許幸之が在籍した当時の東京美術学校を中心に」がある。東京左連（中国左翼作家連盟東京支部）に先駆した青年芸術家連盟と本校の中国人留学生たちとの密接な関

係を知る上で大変参考になる。

二、朝鮮人留学生

朝鮮人留学生は大正八年（一九一九）頃までは毎年数名が在籍するのみであったが、翌九年には急に十一名に増え、同十二年には二十名となり、大正末、昭和初期つまり一九二〇年代後半は毎年二十名以上が在籍。その数は中国人留学生を遙かに凌いだ。昭和六年（一九三一）以降は多くとも十三、四名程度となっているが、留学生全体に占める割合は特別に大きかった。やはり西洋画科（油画科）が多く、六十名、彫刻科は十八名、図案科と図画師範科が各四名、日本画科、鍛金部、漆工部が各一名であった。

一九二〇年代後半における朝鮮人留学生の急激な増加は、それ以前の留学生たちが帰国して後進の育成につとめたことと、美術に対する関心が急速に高まって来たにも拘らず自国に高度の美術教育機関が設けられていなかったことが大きな原因だが、さらに、朝鮮美術展覧会（鮮展）の開設がそれに拍車をかけたのではないかと考えられる。

鮮展はその第一回が大正十一年（一九二二）六月に京城で開催された。開設にあたっては長年朝鮮で作家活動をしていた高木背水（本校中退）が大きな役割を果たしたと言われる。以来昭和十八年（一九四三）まで継続開催され、日本占領下の朝鮮美術界に秩序を与え、朝鮮の近代美術の発展に少なからぬ影響を及ぼした。詳細については中村義一著「台展、鮮展と帝展」（『京都教育大学紀要』A第七十五号、平成元年九月）、李仲熙著「『朝鮮美術展覧会』創設について（要約）」（一九九五年）その他の研究に譲るが、この鮮展と後述の台展（台湾美術展覧会）の内地審査員の人選が帝展運営の最高権威であった本校校長正木直彦の手に委ねられていたことは明記しておく必要があるだろう。このことに関しては本学に現存する「職員ニ関スル書類」その他に記録があり、第一回鮮展の際は朝鮮総督府側から帝展の大御所である本校教授の黒田清輝と川合玉堂を派遣するよう要請して来たのに対して、正木は黒田に支障があったため教授岡田三郎助と玉堂を派遣したが、第二回展から人選そのものが正木校長に一任され、さらに正木退官後（昭和七年）に至っても本校校長が人選にあたるという慣例が続いたことが判る。例えば、これは昭和十三年、第十七回鮮展の場合であるが、次のような文書が取り交わされている。

拝啓　朝鮮美術展覧會ニ就テハ從來一方ナラザル御援助ニ與リ御蔭ヲ以テ逐年隆盛ニ赴キツツアル次第ニテ御好意ノ程深ク感佩罷在リ候　本年ヨリハ右展覧會ヲ社會教育課ノ主管ニ移シ其ノ第十七回ヲ別紙要項ニ依リ開催致スコトト相成候ニ就テハ毎回御迷惑ノ御儀萬々恐縮ニ堪ヘザル所ニ候得共半島美術ノ發達向上ノタメ右審査員左記ノ通リ御推薦賜ハリ度御依頼迄如此御座候

追テ展覧會規程開催行事日程及第一回以來ノ審査員氏名表等添附致置候間御參考ニ供セラレ度尚展覧會ニ關シ直接色々御指示等モ仰ギ度且ツ右御打合旁々近ク社會教育課長ヲ參趨セシムベク候間宜シク御願申上候

記

第一部（東洋畫）　二人

第二部（西洋畫）　二人
第三部（彫塑及工藝）一人

朝鮮總督府學務局長〔印〕

東京美術學校長殿

〔添付文書省略〕

朝鮮美術展覽會審査員推薦ノ件〔十三年四月五日発送文書控〕

拝啓　朝鮮美術展覽會審査員推薦方御申越ニヨリ左記諸氏ヘ交渉シ夫々承諾ヲ得候間御承知相成度御回答候也

年　月　日　學校長

朝鮮總督府學務局長殿

記

第一部　帝國藝術院會員　橋本関一（関雪）
京都市左京區淨土寺石橋町七〇

東京美術學校講師　矢澤貞則（弦月）
東京市世田ヶ谷區太子堂町三三九

第二部　東京美術學校名譽教授　和田英作
帝國藝術院會員
東京市麻布區笄町八

東京美術學校助教授　伊原宇三郎
東京市世田谷區成城町六二四

第三部　東京美術學校教授　高村豐周
東京市本郷區駒込林町一五五

以上

追テ審査員ヘノ御通信ハ凡テ自宅ヘ宛テ發送相成度爲念申添候

こうした慣例のため、いきおい帝展作家にして本校教官の任にある人が多く審査員に任命されることになった。そして、鮮展では先ず本校の卒業生高羲東、金観鎬、李漢福らが頭角をあらわし、やがて朝鮮美術界の指導者となったため、美術家をめざす若者たちは必然的に本校入学を志願する結果になったと言えよう。なお、朝鮮の諸学校で教えていた本校卒業生は大正九年七名、同十三年十名、昭和三年十八名で、その中には鮮展の西洋画部門の参与をつとめた山田新一、遠田運雄、日吉守らが居た。彼らの活動と留学生増加との関係については今後調査する必要があるだろう。

朝鮮人留学生たちの朝鮮近代美術上に果たした役割については最近韓国で研究の進捗が見られる。洋画の分野については、金英那氏は「韓国近代洋画における『裸体』」（前出『東アジア美術における「人のかたち」』所載）のなかで、「韓国の場合、洋画は、西洋から直接導入されるのではなく日本を経て入って来ており、日本の近代美術とも密接な関係がある点は、韓国近代美術の発展の重要な特徴の一つである。」とし、韓国洋画発展の主な担い手は東京美術学校西洋画科留学生たちであったことを指摘して、「一九〇九年から一九四五年までの間、四十六名の韓国学生たちが東京美術学校西洋画科〔ないし油画科〕を卒業しており、彼らは帰国した後、美術学生を教えたり、鮮展あるいはグループ展に出品したりしながら、当時の画壇を主導したため、彼らが東京で修得した教育方法や彼らの絵画様式は、国内にいた画家たちにすぐ影響を与えることになった。」と述

べている。西洋画科（油画科）出身者についてはこれまでにも文献が比較的多く出ており、その中で例えば『韓国現代美術代表作家一〇〇人選集』（文善鎬編。一九七七年、金星出版社）などを見ると、同科出身の金景承、都相鳳、李馬銅、李鍾禹、金鍾瑛、呉占寿（之湖）、孫一峰、沈亨求、金仁承ら著名画家の業績が採り上げられていて、活動状況が把握できる。今後は他科の出身者も含めて一人一人について検証が進むことを祈りたいが、ここで参考のために美術界で顕著な活動をした人々を中心に紹介しておく。なお、これは編者の依頼による金容澈氏（東京大学大学院美術史研究室）の調査結果に基づく。

西洋画科卒業記念　大正4年3月29日
中列左より中村勝治郎、藤島武二、和田英作、黒田清輝、岡田三郎助、長原孝太郎
後列左より6人目藩寿恒、高義東

一九一〇年代卒業者

○朴鎮栄　最初の留学生（日本画科）だが中退し、その後の消息は未詳。

○高義東　卒業後三年目（一九一八年）に最初の朝鮮人美術団体である書画協会を組織し指導。第一回鮮展に入選。朝鮮最初の西洋画家と目される。一九二〇年代半ばに東洋画に転じ、解放後は大韓民国美術展覧会（国展）で主導的役割を果たし、大韓美術協会会長、参議院議員をつとめた。

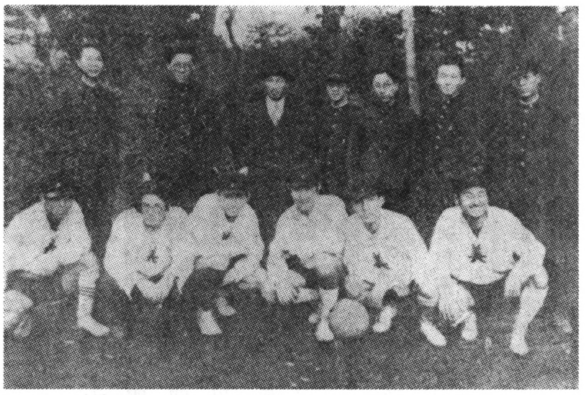
○金観鎬　（本書第二巻121頁に既出）一九一六年に帰国して朝鮮で朝鮮人として最初の西洋画個展を開催。鮮展入選。一九二五年平壌で朔星絵画研究所を設立して後進を育成。解放後北朝鮮で平壌美術同盟常務委員、北朝鮮芸術総連盟美術同盟中央委員・常務委員として活躍した。

○金瓚永　一九一七年帰国して批評活動をし、また朔星美術研究所で西洋画を指導した。

一九二〇年代卒業者

○李漢福　鮮展で数回受賞。京城府進明高等女学校教師。

○李鍾禹　はじめ鮮展に出品。一九二五年朝鮮人画家として最初のフランス留学をし、帰国後朔星美術研究所で指導。書画協会展に出品。一九三四年、張勃、具本雄、金瑢燮、吉鎮燮らと鮮展に反対する牧日会を組織。解放後朝鮮美術建設本部西洋画部委員、朝鮮美術協会副会長、大韓美術協会副会長、国展審査委員、弘益大学校美術大学教授・学長等を歴任。



昭和2年頃の蹴球部員
前列左より韓三鉉、岩松惇（八島太郎）、李馬銅、吉鎮燮、金応璡、金応杓
後列左より2人おいて和田季雄、葉仲豪、山田直次、朴魯弘、鮮于澹
（『東京美術学校校友会月報』第26巻第7号より転載）

○張勃　アメリカのコロンビア大学でさらに美学、美術史を学び、帰国後美術教育、美術行政に従事。解放後ソウル大学校美術大学学長に就任。韓国美術家協会所属。ソウル美大派のリーダー。

○金復鎮　号井観。本校在校中帝展入選。帰国後鮮展彫刻部門で活躍した。一九三六年朴広鎮、金殷鎬、許百鍊らと朝鮮美術院を創立、彫刻指導にあたり、第二世代彫刻家文錫五、金景承、尹孝重、李国詮らを育てた。美術評論、文芸評論の方面でも活躍し、また、社会主義運動にも参加して六年余り獄中生活を送った。韓国近代彫刻の先駆者と言われる。

○李昞圭　養正校で美術教師および財団理事をつとめる。書画協会展、牧日会展に出品。解放後国展審査員等歴任。

○李済昶　培材高校、中東高校美術教師をつとめる。

○都相鳳　号陶泉。書画協会展に出品。解放後淑明女子大教授、大韓美術協会会長、芸術院会員。

○朴広鎮　一九二八年緑郷会創立会員、一九三六年朝鮮美術院創立会員。

○申用雨　東京の日本美術協会展に出品。

○金浩龍　鮮展、日本美術協会展に出品。

○鮮于澹　帰国後美術教師をつとめ、解放後北朝鮮芸術総連盟常務委員兼黄海南道委員長、北朝鮮美術同盟委員長、中央美術製作所長、朝鮮美術家同盟絵画分科委員長、朝鮮美術博物館館長、平壌美術大学学長等を歴任。

○金周経　本校在校中ナップに加入。帰国後一時京畿中学校などで美術教師をつとめ、鮮展に出品。一九二八年朴広鎮らと緑郷会を結成し、展覧会を開き、評論活動を展開。一九四六年越北、平壌美術専門学校（平壌美術大学の前身）創設とともに校長となり、十二年間勤務し、また北朝鮮美術家同盟中央委員、朝鮮美術家同盟中央委員を歴任した。

一九三〇年代卒業者

○黄述祚　黄海道開成で美術教師をつとめ、慶州に帰郷して古跡保存会に参加。書画協会展、東美展（本校出身者の組織）に出品。

○李海善　一九四〇年写真に転じ、白洋写友会を組織して後進を指導。解放後大韓写真芸術家協会を創立して会長をつとめた。

○宋秉敦　牧日会会員となり、解放後は国展推薦作家。創作美術家

協会展出品。ソウル美大非常勤講師をつとめた。

○金瑢燮　号近園。高校生のとき鮮展に入選したが、本校卒業後は書画協会展にのみ出品。一九三〇年に前出の東美展と芸術至上主義を標榜した白蛮洋画会を、一九三四年牧日会を創立し、一九三〇年代の画壇を主導。美術史研究にもつとめ、『朝鮮美術大要』を出版。解放後は朝鮮美術建設中央本部で中心的役割を果たし、ソウル大学校美術大学教授となったが、韓国戦争のとき左翼の朝鮮美術同盟の一員として活動、北側へ行き、画壇の中心的存在となり、平壌美術大学教授に就任。『朝鮮画技法』『朝鮮画彩色法』などの著述をなし、北朝鮮の朝鮮画の理論的土台を提供した。朝鮮古美術に関する著述もある。

○呉占寿　之湖と改名。はじめ鮮展に出品したが、一九二八年緑郷会を組織。解放後は朝鮮美術建設本部主催の解放記念美術展およびその活動に参加。朝鮮美術家同盟結成の際中央執行委員・美術評論担当として活躍。朝鮮美術同盟発足の際は李仁星とともに共同副委員長となる。一九四八年光州美術研究会を創立、翌年朝鮮大学校美術大学教授となり、韓国戦争の際左翼に参加して一時投獄されたが後に復職。ピカソ批判、非具象絵画批判、ハングル専用反対等の評論活動を行なったことでも知られる。

○李順石　ソウル美大教授、国展運営委員・審査員、芸術院会員となる。

○李馬銅　本校在校中から鮮展に出品し、卒業の年に特選となる。帰国後牧日会、書画協会に参加。普成高校美術教師、弘益大学校美術大学教授・学長等を歴任。国展審査員、牧友会会長、韓国美術協会会長もつとめた。

○姜昌奎　鮮展で八回特選。帝展出品。解放後国展審査員歴任。

○孫一峰　鮮展に連続出品。帝展と光風会にも出品。国展推薦・招待作家となる。

○沈亨求　鮮展で特選・朝鮮総督賞受賞・推薦作家となり、一九四五年梨花女子大学校美術科を創設し、教授に就任。国展で活躍。代表的官展作家。

○金仁承　鮮展で昌徳宮賞受賞・推薦作家となる。戦時下、沈亨求らと積極的な附日活動をし、解放後梨花女子大学校美術科教授となり、一九五八年牧友会を創立。さらに韓国美術協会理事長、梨花女子大学校美術大学学長、芸術院会員となり、一九七四年アメリカへ移住。代表的官展作家。

○徐鎮達　本校在校中から鮮展に出品。卒業後美術協会展に出品。その後美術教師となり、解放後釜山で美術研究所を経営。

○金景承　鮮展で特選。のち国展審査員、弘益美術大学教授、芸術院会員となった。

○尹承旭　解放後ソウル大学校美術大学教授、国展審査員歴任。韓国戦争のとき拉致される。

一九四〇年代卒業者

○金鍾瑛　徽文高校で美術教師張勃（前出）の指導を受け、勧誘されて彫刻を専攻。解放後ソウル大学校美術大学教授に就任。国展推薦作家兼審査員、韓国美術協会代表委員、韓国デザインセンター理事長、芸術院会員。一九五三年ロンドンで開催された国際彫刻展に「無名政治囚のための記念碑」を出品、入賞して頭角をあ

らわし、盛んな製作活動を展開。抽象彫刻の先駆者と言われる。

○尹孝重　鮮展で朝鮮総督賞、昌徳宮賞受賞。解放後弘益大学美術科科長となり、国展推薦作家兼審査員、芸術院会員、弘益大学校美術大学学長、大韓美術協会副委員長、韓国美術協会副理事長等歴任。記念彫刻の第一人者。

○鄭寛澈　本校同窓生金河鍵、韓相益らと黄土会を結成。平壌公立商業学校美術教師。解放後朝鮮共産党平安南道地区委員会宣伝部で活動。のち北朝鮮で目ざましい活動をする。

○金興洙　高校在校中鮮展に入選。一九五五年フランス留学。国展推薦作家。一九六七年以降アメリカで抽象画に独自性を発揮。

なお、朝鮮人留学生については平成元年秋にソウルで「東京美術学校韓国人留学生自画像展覧会」が開かれ、本学芸術資料館所蔵の卒業制作自画像が展示された。留学生活の一端が窺える資料としては金興洙氏の「戦時下の留学生活裏話」(『杜』第四号。平成二年、東京芸術大学美術学部同窓会)がある。そのなかには配属将校に抵抗して昭和十七年に退学した韓相益に関する記述もある。

三、台湾人留学生

台湾人留学生も西洋画(油画)科に最も多く十四名、次いで図画師範科六名、彫刻科七名、工芸科鍛金部、建築科各一名であった。一九二〇年代に入って数が増え始め、在籍者が最も多かったのは一九二八年の十名であった。一九三一年を境に急に減少するが、その原因について白雪蘭は「一九三〇年代以降台湾人留学生は減少していったが、これには二つの原因が関与していた。一つは、留学生に限って東京美術学校入学試験の出題を優遇する制度を廃止した結果、台湾人留学生にとって美術学校入学が大変困難になったことである。もう一つは、日本の第二次世界大戦参戦による社会情況の緊張である。」と記している(『洋画の動乱——昭和十年』平成四年、東京都庭園美術館)。その在籍総数は二十九名に過ぎないが、彼らは台湾の近代美術の発展に実に大きな影響を及ぼした。

台湾人留学生も朝鮮人留学生と同様、はじめは日本の官展の公募に挑戦するのみであったが、一九二六年(大正十五年)以降台湾で画期的な美術活動が起こり、若者たちの活躍舞台が作られて行った。すなわち一九二六年八月、本校生陳澄波、陳植棋および台湾の青年画家たちが七星画壇を組織し、第一回展を台北で開き、翌一九二七年(昭和二年)九月には廖継春、陳澄波、顔水龍、張舜卿、范洪甲ら本校在校ないし卒業生で新竹以南の出身者たちが組織した赤陽洋画会が台南で第一回展を開催。その模様を『東京美術学校校友会月報』第二十六巻第四号が次のように伝えている。

赤陽會美術展(臺灣出身者)　臺南州下等青年留學東京美術專門學校〔東京美術学校〕出身及在學生。組織赤陽洋畫會。開第一回作品展覽會於臺南公會堂。原定九月一日開會。因會場被榕樹會捷足先登。乃延越二日午前八時始開。其作品范洪甲氏二十二點。張舜卿氏十五點。陳澄波氏二十五點。廖繼春氏二十四點。顔水龍氏三十五點。凡此作品。或繪伊豆。八幡諸風景。或描上野之初雪。淺草之遠望。或畫日本橋與本市風景。日比谷公園等〔。〕此會創立始基者七子。恰如竹林七賢。其藝術之精巧。與夫創立基礎之鞏固。皆足爲本島美術界開一紀元〔。〕第一日觀衆七百餘人。第二

日臻約千人。第三日至正午止。已達六百餘人。且多冒雨而來。又値星期。中等男女學生。對斯道興味者。亦多參觀。此第三日欲至午后八時閉曾[會]。其觀衆必冠第一二日也。

七星画壇と赤陽洋画会は合併して一九二八年に赤島社となり、翌一九二九年（昭和四年）に第一回展を開いた。一九三四年には本校卒業の陳澄波、顔水龍、廖継春、李梅樹、李石樵および関西美術院卒業の楊三郎、日本美術学校に学んだ陳清汾ら実力を具えた作家たちによって台陽美術会が組織され、一九三五年以降十年間にわたって台陽展を開催、台湾人美術家の間の最大勢力となる。

一方、一九二七年には台湾美術展覧会（台展）が開設され、本校留学生たちにとっても恰好の活躍舞台となった。この官展は一九三八年に台湾総督府美術展覧会（府展）と改称、一九四三年まで開催が続き、朝鮮における鮮展と同じような機能を果たす。ただし、開設に至る経緯は鮮展と異なり、台湾の諸学校に在職していた日本人美術教師石川欽一郎、塩月桃甫、郷原古統、木下静涯らの主唱に基づいて開催の運びとなったもので、第一回展の審査は彼らが担当した。

石川欽一郎は、もと明治美術会所属の画家で、平明な風景写生の水彩画を多く描いた。明治四十年から大正五年までと、同十三年から昭和七年までの二度台湾に滞在して総督府国語学校およびその後身の台北第一師範学校で美術を教え、青年たちに強い影響を与えた。本校留学生のなかには石川門下生が多い。近年、その業績に関する研究が進み、成果があがっているが、特に立花義彰著「石川欽一郎　人と作品」上、中（『紀要』第七号、第十一号。静岡県立美術館）は台湾の政治、文化状況のもとでの石川の業績の意味を解明しようとしている点で大変参考になる。

塩月桃甫は本名を善吉といい、明治四十五年本校図画師範科卒。大正十年から昭和二十年までの間、台北一中、台北高校等で美術を教えた。昭和五十九年に台北一中卒業生の南十字星（サザンクロス）会が発行した『南十字星』第一巻第四号の「塩月桃甫画伯追悼特集」に遺作と足跡が紹介されているが、それを見ると石川欽一郎とは作風を異にし、フォーヴィズムの影響を受けた画家であったことが判る。

郷原古統は本名を藤一郎と言い、桃甫の二年先輩の図画師範科卒業生。大正六年から昭和十一年までの間、台北一中、台北第三高等女学校等で教えた。

木下静涯は本名源一郎。竹内栖鳳門下の日本画家であった。台展は彼らの尽力によって始まり、第一回展では前出の廖継春と陳植棋が特選を獲得した。第二回展からは鮮展と同様に内地からも審査員を招くことになり、その人選はやはり本校校長の手に委ねられた。左記は昭和十三年に取り交わされた文書の抜粋である。

昭和十三年七月十五日　　臺灣總督府總務長官　森岡　二朗

東京美術學校長殿

總文第二八三號

拜啓　愈々御清穆之段奉賀候

陳者本島ニ於テハ美術思潮勃興ノ機運ニ順應シ、一ニハ本島關係作家ノ切磋琢磨ノ機會トシ、一ニハ藝術趣味ノ向上普及ノ一助タラシムル爲從來臺灣教育會ノ事業トシテ昭和二年ヨリ引續キ毎年〔昭和十二年は日中戦争勃発のため中止――編者註〕臺灣美術展覽會ヲ開催致候處最近ニ於ケル日進月歩ノ美術界ノ趨勢ニ追隨シ且時代ノ要求ニ應ゼンガ爲ニハ之ガ更ニ一段ノ強化ノ要有之ト認メ機構ノ改革強化ヲ圖リ本年ヨリハ別冊臺灣總督府美術審査委員會規程及臺灣美術展覽會規程ニ基キ本府主催ノ下ニ開催〔ママ〕スコトト相成其ノ第一回ヲ今秋十月臺北市ニ於テ開催可致目下着々準備中ニ有之候

然ルニ展覽會ノ中心機構トモ謂フベキ審査委員會ノ構成ニ關シ本島ニ於テハ未ダ審査委員トシテ適當ナル人物尠ナキヲ以テ中央畫壇ニ於ケル斯道權威者ヲ是非審査員トシテ招聘依囑シ以テ審査委員會ノ充實強化ヲ圖ルト共ニ展覽會ヲシテ一層權威アルモノタラシメ度希望ニ有之候　就テハ御多忙中御迷惑トハ存候ヘ共右事情御斟酌被下審査委員ノ選定並御派遣方ニ關シ左記御了知ノ上何分ノ御盡力相煩度

此段御依頼申上候　　敬具

記

一　内地側審査委員ハ東洋畫及西洋畫各二名宛（各部共一名ハ主任トス）ヲ依囑致度候

二　人選ノ範圍ニ關シテハ一切貴下ニ御一任致候

三　審査委員ノ旅費、滞在費、謝禮等一切ヲ合シ手當トシテ主任ニハ一千圓以内他ニハ八百圓以内宛ヲ支出致ス豫定ニ有之候

四　遅クモ八月末頃ニハ審査委員ヲ依囑致度ニ付御含置被下度候

五　審査委員ハ審査日迄ニ御來臺相成レバ結構ニ候

六　臺灣美術展覽會開催大要豫定

イ　搬入受付　十月十四、五兩日

ロ　鑑査、審査　十月十六、七兩日

ハ　公　開　十月二十二日ヨリ

〔添付文書省略〕

臺灣總督府總務長官ヘ回答案〔十三年八月〕〔三十一日立案〕

拝啓　陳者貴府美術展覽會審査委員人選方御申越ニヨリ早速御回答申上ベキノ處文部省美術展覽會ト略ボ同時期ナル爲メ文展審査員タルモノヲ避ケテ選定スルコトヲ要シ候處本年ハ文展審査員〔東洋畫〕ノ決定ガ例年ヨリ後レタル爲メ當方ノ人選ニ支障ヲ來シ日本畫主任ノ如キハ諸方ニ交渉シ居リ延引シタル次第ニ有之候間不惡御諒承被下度候　本日漸ク左ノ通リ取定メ夫々内諾ヲ得候間御報告申上候

〔東洋畫〕日本畫　主任　野田九浦（本名道三）

山口蓬春（本名三郎）

西洋畫　主任　中澤弘光

大久保作次郎

〔以下審査委員略歴、住所その他省略〕

本校在職中の教官で台展の審査員となったのは小林万吾、結城素明、藤島武二、川崎小虎、伊原宇三郎で、府展では和田三造が派遣

されただけであった。

なお、台湾で教職に就いていた本校卒業生は大正九年一名、同十三年四名、昭和三年九名、同十五年十一名であった。

台湾人留学生の帰国後の活動状況については、台湾では昨今近代美術史の研究が盛んであり、また、留学生総数が少ないこともあって、一人一人について調査が進められているため、相当詳細に把握することができ、彼らが近代美術の礎になったことが確認できる。特に顕著な功績は洋画を飛躍的に発展させたことで、それは自ずと彼ら留学生を媒介として本校西洋画科教官の作風が台湾の洋画の作風に強く影響する結果となった。この点について白雪蘭は「台湾の

岡田教室歓送会記念（陳俊明氏提供）
中央岡田三郎助、後列左より4人目李梅樹

初期洋画は、主に一九二〇年代に東京美術学校で教鞭を取った画家たちに影響されたと言っても決して過言ではない。これらの教授陣のうち、黒田清輝は一九二四年に世を去ったが、岡田三郎助、藤島武二、田辺至、小林万吾、安井曽太郎〔安井はこの時期には本校とは無関係――編者註〕らは、若き台湾人留学生たちに最も影響のあった作家として評価されている。」と記している（前掲書）。

美術界で著しい活動をした人々を左に掲げる。ただし、なかには日本や中国に定住して台湾の美術には殆ど影響を与えなかった人たちもいる。

一九二〇年代卒業者

○黄土水　最初の台湾人留学生で、彫刻科木彫部卒業の年（大正九年）の第二回帝展から連続四回入選（第六回帝展で落選してから不出品）。研究科に進み、曠原社の北村西望のもとで研鑽を重ねた。池袋のアトリエで制作していたが、昭和五年に死去。

○王悦之（劉錦堂）　卒業後上海へ行き、王悦之と改名、月芝と号した。国立北京美術学校教授、国立西湖芸術院西画主任教授、京華美術専科学校長、北平美術学院長、北平大学芸術院教授等を歴任し、北京で死去。

○顔水龍　帰国後渡仏してさらに修業。台展、パリ・サロン、赤島社、台陽美術協会、台湾造型美術協会等に出品。台展審査員。台陽美術会創設会員。

○張秋海　再度赴日して通産省工芸指導所で研究し、南亜工芸社を起こす。台南高等工業学校（成功大学の前身）講師、国立芸専工芸科兼任教授、私立台南家政専科学校美術工芸科教授、台北市政

府顧問等歴任。

○陳澄波　本校在校中帝展に入選、七星画壇・赤陽洋画会を組織。卒業後帝展その他日本、台湾の諸展に出品。上海の新華芸術専科学校、昌明芸術専科学校、藝苑絵画研究会等で指導。台陽美術会創設会員。

○廖継春　台展審査員、台陽美術会創設会員。

○王白淵　上海美術専科学校に勤務。美術評論家として活躍。

○陳植棋　卒業後七年間在日。帝展、台展、光風会展、槐樹社展、白日会展等に出品。七星画壇、赤島社結成に参加。

一九三〇年代卒業者

○何徳来　帰郷して新竹美術研究会を組織したが、再赴日し定住。戦後は新構造社の主要メンバーとして活動。

○郭柏川　北平芸術専科学校、京華美術専科学校で教え、一九四八年台湾に定住。成功大学建築学系で教え、台南美術協会を組織。梅原龍三郎の友人。

○陳慧坤　台中商業学校、台湾師範学校、台湾師範大学で教える。

○李梅樹　台展、新文展に出品。台陽美術協会創設会員。解放後文化学院美術系教授、国立芸専教授（一九六七年彫刻科を開設）、師範大学美術系教授、中国美術協会理事長等を歴任。外に長年にわたり精力と資金を傾注して郷里三峡鎮の祖師廟を再建した。

○李石樵　本校在校中に帝展に入選。以後帝展、新文展に出品。裸婦に力量を示す。帰台後台北の自宅で李石樵画室を開き、後進を育成。台陽展に出品。

一九四〇年代卒業者

○廖徳政　開南商工、実践家専、国立芸専等で教え、紀元美術会、青雲美術会に所属。

なお、付記すれば、台湾近代美術史の研究が盛んに行われるなかで、最近の研究として紹介しておきたいものに顔娟英著「殿堂中的美術・台湾早期現代美術与文化啓蒙」（『中央研究院歴史語言研究所集刊』第六十四本第二分。一九九三年）があり、そこに掲げられている参考書目も大変参考になる。台湾では個々の作家の回顧展もよく行われ、作品集の出版も盛んである。上記の李梅樹などは幾種類もの画集が出ているだけでなく、去年三峡鎮中華路に記念館ができて留学時代の資料なども展示され、また、祖師廟へ行けば、彼の指揮のもとに台湾の彫刻師たちが伝統的技術を駆使して彫りあげた精緻な彫刻群を見ることができ、業績の全貌が把握できる。何徳来についても、彼は主に日本で活動した人だが、平成六年末から七年春にかけて台北市美術館で「何徳来九十紀念展」が開催され、その独自の画風と足跡が広く紹介された。今後本校留学生たちの業績の調査・紹介は益々進展を見るだろう。

③　板垣鷹穂の在外研究

大正十三年四月二十一日、西洋美術史授業担当講師板垣鷹穂は文部省在外研究員（私費）を命ぜられた。

板垣は明治二十七年十月十五日東京に生まれ、大正四年九月から同十年三月まで東京帝国大学文学部撰科に在学して専ら西洋美術史を研究。同十年四月に矢代幸雄西欧留学中の本校西洋美術史授業担